

ここまでの物語:

ジャクリーンは夜毎に未来を目にしていた。彼女の夢は、まだ起こっていない出来事 — 通常は血と炎に包まれた陰惨な光景 — で満たされていた。今回も例外ではない。彼女はアーカムという名の都市を夢に見た。静かな街が恐るべき怪物に破壊され、世界がそこから数千年の筆舌に尽くしがたい混沌へと投げ込まれるのを。これまで、彼女の夢が間違っていたことはなかった。

最後に見た映像が無視できなかったジャクリーンは調査を行い、その破滅の都市がある場所を知った。彼女は自分を脅かす都市に出向き、来るべきその破滅を止めようとした。暗い夢の中の場面に引き込まれるように、彼女は深呼吸をすると骨董品店の扉をくぐった — 悪夢がもうすぐ現実となるはずのその場所へ。

ここまでの物語:

ダイアナ・スタンリーは2年前にアーカムに引っ越してきた。小さな衣料品店の店主だった彼女は、できるだけ早く地域に溶け込みたかった。そこで彼女は、商工会議所や女性集会、歴史協会などに参加することにした。彼女の努力は実を結び、商売は繁盛していった。そしてほんの数カ月後、カール・サンフォードは彼女をアーカムの極めて上流階級のみが所属するクラブへと彼女を招待したのだった — 銀の黄昏会へ。

彼女の最初の喜びは、やがて恐怖へと変わっていった。毎週の集会は、彼女が騎士団の第二階級に昇格して以来さらに不穏な物となり、彼女の眠りは悪夢のような怪物に取り付かれた。先週、彼女は実際に闇の生物が召喚されるのを目撃し、サンフォードが旧支配者と呼んでいた霊体を召喚する邪悪な計画が実行に移されたことを知った。その瞬間、ダイアナは騎士団を離れることを決心しただけでなく、彼らを止めようと思いついたのだった。彼女は騎士団がいつ彼女の行動に気づくかを気にかけてはいるが、これが彼女にとって唯一の贖いのチャンスであり、そのためにはすべてをかけるつもりだ。

ここまでの物語:

アンダーソンはユカタンへ向けて、七人の隊員を引き連れて旅立った。戻ってきたのは二人だった — おおよそのところは。実際にジャングルを生きて脱出できたのは三人だったが、ミッチ・ブラウンは完全に人が変わってしまった。実際の話、彼は今や何かをぶつぶつぶやくだけの狂人で、すでに精神病院に担ぎ込まれている。

遺跡で見つけた石版を、レオは読むことができなかった — 読めるのは七人の中の一人だったフォルク博士だけだった。彼の手の中には名博士のメモが残されている。それはフォルクが発狂する前に書き記したものだ。彼がアンダーソン隊の隊員二名を殺害する前に。

アンダーソンはユカタン探検を企画したフィリップス博士の元へと船に乗ってまっすぐに向かってきたが、そこで耳にしたのは、彼が死んだということだった。フィリップが死に、今やアンダーソンに残されたものは、狂気じみた殴り書きだけだった — 今日の日付に血で印がつけられた殴り書きが。

ここまでの物語:

父はよく言っていた。「ジャズってのは酒みたいなものさ。これさえあれば、すべてはするっと進むんだ」

父はよく、馬鹿馬鹿しい話をしてくれたっけ。

父のトランペットを手にして以来、ジムにとってジャズはトラブルの種でしかなかった。ラッパの内側には何か奇妙でこの世の物ではないような書きつけがあったが、そこから流れる音はスムーズかつダークで、それはまるで良質のコーヒーのようだった。そこには足を踏み鳴らし指を弾かずにはいられない何かがあった。このトランペットのおかげで彼は様々なギグに参加することとなったが、それもウイドウ・ジェンキンスが起き上がって踊り出すまでの話だった。それは彼女自身の葬儀の場だったのだ。それ以降、彼は仕事を見つけるのが厳しくなった。特に葬儀の場では。

それ以降、彼はジャズについて多くを学んだ — そして、墓場荒らしが寒い秋の夜に語るような事柄を。後に彼らは、何もかもがかくあるべき「終末」について語ってくれた。最後のラプソディだ。実際のところ、彼はその考えにはあまり本気にならなかった。それまでにやっておきたい曲が彼にはたくさんあったから。ヴェルマのダイナーの席に腰掛け、ジムは最後のアンコールになるかもしれない前の、最後の熱いコーヒーを飲み干した。コーヒーはスムーズかつダークだった。まるでこの夜のように……。

ここまでの物語:

ほとんどの人が、マーク・ハリガンを狂人だと思っている。そうすれば、彼を非難することにはならないから — 戦争から復帰し、人々が目にするべきでないものを見て、肉体や精神をずたずたにされて戻ってきた者はたくさんいる。しかし、ハリガンは五体満足で戻ってきた。彼にはソフィーがいた。

ソフィーは彼を信じていた。彼が何を見たのか、彼女に手紙を書いたときも — それは人が人を殺すのでは、怪物のような何かが人を殺す場面だった。彼女は信じてくれた。それだけで、彼は塹壕の中で正気を保ち、生き延びることができた。

そして彼は故郷に戻り、ソフィーの部屋を訪れたが、そこで彼は、なぜ彼女が彼を信じてくれたのかを知ることとなった。彼女は自らの内側にその怪物を抱えていたのだ。その怪物は、彼女を内側から貪り食った。彼が恐怖のあまり立ち尽くす目の前で、彼女は虚空へと消えていった。何かが食事を終えたかのように叫び声をあげていた。

今では、誰もがマーク・ハリガンを狂人だと思っている。たぶんそうなのだ。彼は正気を失ったのだ。しかし彼は、その怪物が現実にもここにいることを知り、それを止めようと決心した。南教会の神殿の前にひざまずき、彼はソフィーの魂のために祈ると、彼はこの神に見捨てられた街で犯すであろう数多くの罪の懺悔を祈った。

ここまでの物語:

マリー・ランボーの声はいつでも蟲惑的だ。人々は彼女を「スモーキーなベルベット」と呼んでいる。彼女はジャズを歌うために生まれ、その声には魔法が宿っていると — たぶん、彼らの言っていることは正しい。

かつてマリーは、死者すら踊らせたトランペット吹きの話聞いたことがある。彼女にはそんなことは無理な話だ — 彼女の声は、それに関しては魔法でもなんでもない。しかし、人々がその声を聞くと、彼らはその声に惚れ、彼女に惚れた。彼女にとってはそれでよかった。

先日、マリーの“おばあさま”が亡くなった。こんな老人がニューオーリンズからアーカムへ引っ越してきた理由を、マリーはまったく知らなかった。もっとも、人々がこの老婆について語る物語は、彼女にとっては何の興味も引かなかった。たぶん嫉妬しているだけなのだ。しかし今、彼女はおふくろの宿で、祖母の形見のナイフを手にしている。彼女の耳に聞こえてくるのは、そのナイフの歌声だった。それはまるでスモーキーなベルベットのように……。

ここまでの物語:

だれでも道端で奇妙なものを見ることがある。ウィルソンはもう何年も旅をしてきた。街から街へと流れる中で、彼は様々な片手間仕事を引き受けることで生計を立ててきた — だが、アーカムで起こった出来事のようなものは見たことがない。

ここでは何かが間違っているようだ。独り身で流れ者を生業としている者にとっては、人々や場所に対して第六感が働くようにしておかなければいけない。現在、ウィルソンの第六感はずいぶん街を出るようになっている。今すぐにだ。しかし、なぜか今回は彼の好奇心が恐怖に勝っていた。彼は奇妙な感覚を身に覚えていた。今回のアーカムでやらなくちゃいけない仕事は、階段の修理や塀のペンキ塗りよりも、もう少し大仕事になるだろうと。

ここまでの物語:

南部で生まれ育ったリタは、あらゆる差別と日常的に戦わざるを得なかった。彼女の家族は貧しかったが、彼女は熱心に働き、陸上選手としてミスカトニック大学の奨学金を受けることとなった。そして彼女は、今度は自らの命をかけて戦わざるを得ない状況だ。

誰かが彼女の後をつけている。それだけは確かだった。それが誰かとか何のためにとかはまったく見当がつかなかったが、彼女の寮の周りには、奇妙な人影が何人か見受けられた。先週、リタのルームメイトが襲われる事件があった。彼女が羽織っていたのはリタのジャケットだった。リタは、これは自分と間違われたことによるものだと確信した。

そして今日、リタは警察に動いてもらおうと何時間もかけて説得を続けたが、保安官はもっと証拠が無いことには動けないと言うばかりだ。この個人的な身の破滅の予感から逃げ出してしまうのは最良の選択なのだろうが、それはリタのやり方ではない。そのストーカーがKKKのメンバーだとか、あるいはもっと邪悪なものだったとしても、彼女はそれに立ち向かうつもりだった。彼女がこれまでの人生で世界に立ち向かってきたのと同様に。